

アドルフ・ムシュクにおける 〈日本〉（その一）

野 口 薫

はじめに

マックス・フリッシュ (1911-1991) やフリードリッヒ・デュレンマット (1921-1990) と並んで、あるいはこの二人を継ぐ世代としてスイス文学を担ってきた作家、アドルフ・ムシュク (1934-) の人と仕事を描くドキュメンタリー映画 „*Adolf Muschg – der Andere*“ (監督 Erich Schmid) が 2022 年、制作・公開され、この種の映画には珍しく、スイス中の商業映画館で長期に亘って上映されて大好評を博したとのこと、すでに出回っているという DVD を送ってもらって私も鑑賞した。

90 分ほどの映画は、ムシュクが遠くに福島第二原子力発電所が見える海辺に立って、2017、2018 年に自ら訪れた「フクシマ」を語るシーンで始まり、中核部は、子供時代から今に至る自らの人生における重要なステージを映像で辿りつつ、それらスイス、日本、アメリカ、そして再度故郷スイスにおいて過ごした町々やスポットが、また、自分が生きる上で「書く」という営みが持つ意味を探り、就中、自分と日本との出会い及びそれが持つ意味を、考え考えひとり語りした後、愛してやまない町、京都の鴨川べりや南禅寺付近を彼が静かに散策する映像で終わる。

ムシュクは 1962 年から 65 年にかけて東京・三鷹の国際基督教大学においてドイツ語とドイツ文学を講じたが、その時に彼の授業を受けた一人と

いう縁もあって、私は、ムシュクが1966年、ヨーロッパに帰って間もなく小説『*Im Sommer des Hasen*』¹⁾を発表し、独特の語りと文体をもってヨーロッパの文壇に鮮烈なデビューを果たして以来、小説家として、またベルリン科学芸術アカデミーのプレジデントとして環境問題、原発ほかヨーロッパや世界における重要な問題に関して発言を続ける彼の仕事を遠くから追いつけてきた。2010年代、四十数年ぶりに東京で再会したのを機に、彼のいくつかの短編²⁾、また日本を舞台にした彼の小説のうち、『*Löwenstern*』³⁾ (C.H.Beck, 2013) と、『*Heimkehr nach Fukushima*』⁴⁾ (C.H.Beck, 2018) を翻訳・出版し、交流を保っている。

88歳になるムシュクだが今も旺盛な執筆活動が続け、その間にもほぼ毎年来日して、充子夫人の出身地である京都はもとより、東京、金沢などで執筆や講演を行いつつ、日本への親しみと理解を深めている。「さすがに足腰は弱った」と言いつつも彼はこの11月から12月にかけて、上述の映画を携えて、もう一度、日本を訪れる予定だという連絡があり、スイス文学研究者、新本史斉教授のご協力とゲーテ・インスティテュートやスイス大使館の協力を仰ぎつつ、2022年12月10日(土)午後、お茶の水の明治大学において映画と討論の集まりを企画・準備中である。そこでこの機会に、改めて作家としてのムシュクと向き合う文章を書いてみようと考えに至った。と言っても休みなく作品を発表し続けているたいへん多作な作家ムシュクの全著作を扱う力も時間もないので、彼が日本を舞台、あるいはテーマにしている作品を対象を限り、表題の通り、「ムシュクにおける〈日本〉」というテーマに絞って考えることとし、本稿では(その一)として、ムシュクと日本の関わり方の原点、出発点についてのみ述べること

1) 邦訳は宮下啓三、『兎の夏』、新潮社 1972年。

2) 『ハンズィとウメと私—アドルフ・ムシュク短編集』、朝日出版 2017年。

3) 『レーヴェンシュテルン』、松籟社、2015年。

4) 『フクシマへの帰郷』、eブックランド社、2021年。

にさせて頂く。

I. 『ハンズィとウメと私』 („Hansi und Ume und ich“, 1987 年)

アドルフ・ムシュクは 1934 年、チューリッヒ湖畔のツオリコンという小さな村で、小学校教師の父親 Friedrich Adolf (1872-1948) と彼の看護婦を務め二番目の妻となった Frieda の間に生まれた。アドルフが生まれた時、父親はすでに 60 歳を超えた老人であり、母親はその夫を支えつつ、自らは神経症に苦しむ、無類に優しいが弱い性格の女性であった。アドルフには非常に年の離れた腹違いの兄と姉がいて、兄は「悲劇的文学史」 („*Tragische Literaturgeschichte*“, Bern, 1948) で知られるバーゼル大学教授のドイツ文学者・批評家ヴァルター・ムシュク (Walter Muschg, 1898-1965)、姉は児童文学作家のエルザ・ムシュク (Elsa Muschg, 1899-1976) であった。

この姉エルザは、日本人妻を持つあるスイス人実業家の三人の子供たちの若い家庭教師として 1920 年代の日本に滞在する機会があり、その経験をもとに、二巻本の児童書、『ハンズィとウメ、旅に出る』 („*Hansi und Ume unterwegs*“, 1937)、『ハンズィとウメが帰ってくる』 („*Hansi und Ume kommen wieder*“, 1938) を著した。物語は、(アドルフと同じ小学校に昔、通っていた) 少年ハンズィが、しばらくの間、同じクラスにいて幼い友



„*Hansi und Ume kommen wieder*“ (A. Frauke AG, Bern, 1958.) のカバー

情を育んだ日本人の女の子ウメの両親（父親は日本に仕事の拠点の一つを持つスイス人実業家、母親は日本の旧家の出の女性）の頼みで、ウメの旅の友達として地球の裏側の異国まで旅をし、ここで様々な驚くべきことを体験して一年後にスイスに戻って来るというもの。海を二度もわたり長い汽車の旅の果てにハンズィが到着したところは、すべて様子が変わっていた。

ウメの母親（ママちゃん）が生まれた町では、家々は木でできていて、重たい屋根をのせた高価な納屋のように見えた。彼らを迎えてくれた、見知らぬ国のおばあちゃんは黒い歯をしていて、手招きするときは、まるでハンズィを追い払うように、反対方向に手を動かすのだった。それでいて彼女は、互いに深く身を屈めてお辞儀する土地の人たち皆と同じように、このうえなく親切で、礼儀正しかった。そして彼女も、この人たちと同じように、ハンズィの金髪に感心した。（ハンズィ 7頁）

白い馬がオミクジをくわえてそっと渡してくれるなど、びっくりする光景に出会ったり、きれいな着物をきた子供たちと一緒にホテル狩りをしたり、トリモチで鳥を追う様を見てオトリにされるヒワを可哀そうだと思ったり、山間の避暑地に咲くオニユリを見て「ほとんど故郷のようだ、でもぜんぜん違う、でもきれいだ！」と感心したり。しかしある避暑地にいた時、大地震が起こり、ハンズィたちは無事ではあつ



„Hansi und Ume kommen wieder“ (A. Frauke AG, Bern, 1958.) の挿し絵

たが、その後、熱を出して病気になった彼は、スイスに帰国、母の腕の中に飛び込む。

この本は、アドルフ・ムシュクが「絵本に親しむ年齢を脱して読んだ初めての本らしい本」⁵⁾であった。年老いた厳格な父と病身の母のもと、あまり幸福な家庭環境にあったわけではない孤独な少年ムシュクはこの本に夢中になった。海の遙か彼方の未知の国にこそ、自分をほっこりと温かく受け入れてくれる、なつかしい「家」があるように彼は感じ、「いつの日か、ハンズィとウメのように、日本への旅の途上に身を置いてみたいと願う」ようになる。「それは、私が私自身に到達できるであろう、約束の国」、「異世界ではあるが、異郷に終わってはならない国」、自分の全生涯を支えてくれる豊かさに近づけてくれる「財宝が隠されている国」に思えた。「家では欠けていたもの、それを私は日本に求めた」⁶⁾。

上述の映画の中で、ムシュク自身が「自分の生涯はこの児童書の続編のようなものに思える」と述べるように、幼い頃のこの読書体験は、ムシュクのその後の人生を決定的に方向づけるものとなった。青年ムシュクは、「自分の恋の相手を、旅の同行者として考えられるかどうかを基準に探し」、「美しい形式と呼ぶにふさわしい対象との関係だけを価値として求める織物芸術家」と一番長い交際を結んで、彼女と共に、ヨーロッパの芸術と建築、ドガやロートレックの絵に「日本の痕跡を探し」、「すんなりと伸びたユーゲントシュティールの植物の中に、バウハウスの方法的簡素さの中に日本を見出した」⁷⁾。そして大学卒業後に教師の職を得たギムナジウムから彼は、「日本への就職のチャンスがあれば即座に辞職してよい」という

5) In: A. Muschg, „Die Insel, die Columbus nicht gefunden hat“ 所収の自伝的エッセイ „Hansi und Ume und ich“ (野口訳「アドルフ・ムシュク短編集」, 朝日出版 2010年, 6頁).

6) 同上, 9頁。

7) 同上, 10頁。

約束を取り付け、1962年、東京の国際基督教大学からの誘いがあると勇んでこれに応じたわけである。(この時、新婚で日本に伴った最初の妻は残念ながら「日本」に耐え切れず、子供まで儲けながら離婚することになってしまったのだが。)

II. 『兎の夏』 („*Im Sommer des Hasen*“, 1965年)

A. 「新しい語り手登場！」と瞠目をもってスイスの、そしてヨーロッパの文壇に迎えられたムシュクのデビュー作『兎の夏』は、上述のドキュメンタリー映画で彼が自ら明かしているところによれば、面白いことに、決してはじめから「小説」として構想されたものではなかった。国際基督教大学講師時代、ドイツ語やドイツ文学を教える傍ら、折に触れて、„NZZ“ (新チューリッヒ新聞) に、禅や能など、当時ヨーロッパ人が関心を持っていた日本や日本文化に関する記事を書き送っていた彼は、それら論考が何点か溜まった時、まとめて一冊の本にすることを求められ、単なる論集にするのではなく、たとえば『デカメロン』のように、ある所に何人かの人間が集まって物語や自分の経験を語る、という形にすることを思いつく。そしてその物語的枠組みを書いているうちに、それがいつしか「小説」の形になって、結果的に、論考は不要になったのだという。

ある男が何かを書きたいという衝動に捉えられ、しかし自分に散文は書けないと分かっていたので論文を書く。論文は一冊にまとめられることになる。それには枠組みが必要だ。すると何とこの枠組みが小説になり、そして論文は抜け落ちたのです。自分がやりたかったことが最後にそこから生まれ出るためには、自分で自分を計略にかけるといふ戦術が必要であった、まるでそんな風に見えます。

ムシュクの考えた枠組みは、早くから日本と通商関係を持ち、間もなく

100周年を迎えようとしている大企業「シャルル・イノアン社」が、その記念行事として、

スイスの若い文筆家を六人、シャルル・イノアン基金で日本へ送り、半年間そこに滞在させて彼らに思いのまま見て回らせる。彼らの義務はただ一つ。わが社のために長からず短からぬ文章を書いてくること。その内容が多少なりとも日本に縁があること。（『兎』7頁）⁸⁾

というもの。まずは六人の候補者の人選にあたり、半年後、自ら現地へ赴き、六人を一か所に集めて彼らの日本レポート朗読会を開き、原稿を持ち帰ってなお精査した結果をイノアン社の現社長マヌエル・イノアンに報告するという任務を自ら負うのが、同社広報部長ビショフ。小説はこのビショフがマヌエルに宛てて認めた長い手紙という形を取り、一人称の語りによって進められる。ビショフはスイス片田舎の町の料理店「鷹亭」(Zum Falken)の常客となり、その一角のテーブルに陣取って三週間、連日、真夜中過ぎまで座り通し、集めた原稿を読み返して報告書を作成しようとしており、この位置・この時点からの「回想」の形で、日本の本州北端、十和田湖のほとりの宿で耳を傾けた候補者たちの報告や体験談を直接話法または間接話法を交えながら語る。

物語はこうして「二つの時空にまたがって」(238頁)展開される。つまりスイス「鷹亭」におけるビショフの「語りの現在」(Erzählgegenwart)と、六人の候補者プラス「イノアン社日本支社」から派遣されている接待役のアキノリ、そして審査にあたるビショフ自身という八人が登場する十和田湖畔の「ヤスミヤ」における「物語の現在」(Erzählte Gegenwart)が目まぐるしく交代する形で物語は進行する。このことはスイスの現在と日本で

8) 以下、『兎の夏』からの引用は宮下啓三訳による。

体験された過去が互いに相対化される効果を持つ。また登場人物の経歴や関心のあり方によってその日本体験は異なる色彩を帯び、しかも語り手ビショフが彼らに寄せる共感の度合いによって語りのトーンも微妙に異なるため一義的解釈は難しい複雑な読み物になっているのが『兎の夏』という小説である。

もう一つ注意すべきは、小説の最後に至って明らかにされるのだが、ビショフのこの手紙は、実は上司マヌエルに、広報部長の職を退きたいので許してほしいという、辞意を伝える別れの手紙であるという事実である。ビショフは述べる。「むろん辞意を告げるだけならメモ一枚で事足りたであろう、しかし何故？と、マヌエル、君に問い返されたらその答えは容易ではない、ほとんど不可能だ」、「ぼくはこの不可能事を克服しようとして、遠い国へひきずって行き、いくつもの声に分割し、いくつもの人物に仮装させた」(239)。ここに至って読者は、「六人」は実はビショフが自分の血を分けた分身であり、彼のいくつもの面を代表していたのだ、という、フィクションのフィクション性を改めて知らされるのだ。

B. 以上を踏まえて、物語の紹介に入る。十和田湖畔の「ヤスミヤ」では、六日間の合宿期間中、午前中の二時間、ビショフの部屋に集まって、一日に一人ずつ、順番に自作を朗読することになる。「デカメロン」ならぬ「ヘキサメロン」である。ここではその順番に従って報告者たちのポートレート、及び、彼らがどのように日本を体験し、どのような発表をすることになったのか、整理することとする。

1. 初日の発表者はヨハンネス・メルゲリ。高校教師で、ビショフが「半信半疑で拾い上げた男」であったが、「さだめし、最も感覚鋭い文章を出してくれそうな男」でもあった。彼はアレクサンダー大王にまつわる戯曲を書き、「濃厚かつ機知によって入念に細工を施された序文」をもって作

品の全容を紹介後、二、三の場面を朗読した。「わたしがもう一度論文を書くようにいわれたら、包装技術の観点から日本の全体像を書いてお目かけます。心理学的・社会学的見地に立って、論理の飛躍なしに書いて見せますよ」(47頁)とも言っていたメルゲリは、実は、日本滞在の間、余り移動はせず、(作者ムシュクのように)トーキョーのある国際大学に身を寄せていた。「教育の分野で日本の本質に触れることは、漫然と歩き回って少しばかりの物を嗅ぎだすこととは全然、わけがちがいますよ」というのが彼の弁明であった。「大学教授資格を取るおつもりですか？」というビショフの問いに彼は、「全然不当とは思いません、実際、私は多くの資料を集めました、日本の演劇に関する資料です」と答える(59頁)。

2. 二日目の発表者はフロリアン・ディステル。「栗色の、きわだって温順な目を持った男。人に罪悪感をもたせるほどの鋭い光を放つことのできる目、貴公子然として額の中央には結晶したようなしわが一本走っていた。騎士、貴族的騎士のために詩を作る男、聖ゲオルゲの後裔。彼の父親は牧師で、どこやらのプロテスタント系自由教会に属していたが、息子は父に背を向けた」(26-27頁)。

ディステルの朗読した「人形劇論」は独特の雰囲気を持ち、その「人間味」によって聞く者の気持ちを捉えた。しかし「その根底に尋常でない事情が隠されている」ことは誰もが感じ取っていた。「人間はだれしも、心の中のどこかに、彼と同じ性情を持っているものだ。地理の授業の時に自分だけの崇高で人知れぬ土地を持ったおぼえがだれにでもあるように、彼のような人間をだれもが心の中にもったことがあるものだ」(87頁)。自分の中にも彼と共通するものがあるのを感じ取っていたビショフは、ディステルとは「不安定で、常に危険を孕んでいて、そのときどきの機転によってうまく保たねばならない平衡状態」を保ちつつも、思い出してみると「六日の間、ある意味では他の者たち以上に強く、コミュニケーションしてい

た」。それにも拘らずゆっくり彼と話す機会を逸したままであったのは悔いても悔いきれないことであった。というのも、スイス帰国後に知らされたところによれば、ディステルは「ほかの五人が日本を去る日、予定通りオランダ大使館に戻る代わりに、ふたたびヤスマヤに現れ、風呂場で自死を遂げ、木の桶の中に血まみれになって倒れているのを発見されたのだ。

「矢来の向こうにまどろんでいた日本を開くための鍵」、ディステルはそのような鍵を持っていたのかも知れない、とビショフは思う。「彼の日本。確かに彼は、半年の滞在にしてはできすぎたほどのことを経験していた」。ディステルが彼の「遍歴」から勝ち得たのは「最高度に実用不可能な物、崇高な生の幻影の物質化であった。これが逆に、辛うじて物質化を免れた人間味を、今なお感動的に認識させる力を持った」(88頁)。ビショフはディステルの人形劇論を、論集の巻頭におくことを決める。

それにしてもディステルはなぜ死なねばならなかったのか。ヤスマヤでの合宿が終わる前日の午後、候補者の一人ゲゼルと十和田湖畔を散歩していたビショフは、見るべきではないものを見てしまう。人気のない入り江の「巨大な岩塊のかたわら、ふかぶかと垂れ下がった松の枝の陰で、フロリアン・ディステルが水中に立っていた。彼の躰は痙攣してのけぞっていた。一方の手で彼は頭上の枝をつかみ、もう一方の手の中に、ひろげた足の間で直立しているものを握っていた」のだ。二人は咄嗟に岩陰に身を引いたが、ディステルは彼らに気づいたに違いない。「電光のようにすばやく体をむこうにねじまげ、蹴飛ばされた犬のように背を丸めた。そして嘔吐せんばかりに、あるいは出産するかのように、一度、また一度と彼の躰に衝動が起こった」。ビショフはその時、「何か」を連想した。あとになって思い返すとそれは、かつてバレンシアで目にした、「息の根をとめられ損なった牛が死ぬ様」(231頁)であった。

夕食の時、何度か視線が合ったが、「ディステルの眼差しには一種の毅然さがこもっていた。ほくは、自分がディステルの自尊心を過小評価して

いたのだ、と思ってほっとした。そして、何もなかったのだ、何も起こりはしなかったのさ、と自分に言い聞かせた。一見したところディステル自信がそう思い込む気力をもっているようだった」(232頁)。そしてトーキョーまで皆一緒に帰り、ウエノ駅で別れを告げるべく、握手をした時も「ぼくは自分の勘に寸分の狂いもないと思った」。ところがディステルは、「おりしもぼくがシナ海の上空で、背をゆったりとシートにもたせかけていた頃合いに、ヤスミヤにとってかえし、ぼくの軽率な想像の上に彼の権利主張の刻印を黒々と押したこと」を、今になって知ったのだ(232頁)。——ビショフは考える。「ジュピターのように誇らかな一物を輝かせていた」ことを恥じる必要などなかったのに、それを恥じてディステルが身を背けたこと、「あの驚愕の一瞬に父の精が威力をふるって彼を萎えさせた。彼が恥辱と感じたのはこうした点だったのだ。このことを感じたからこそ死ぬ気になったのだ」(233頁)。

ヨーロッパに帰った後、ディステルの両親宅を訪ねたゲゼルがビショフに報告したところによれば、「線が細くて上品な物腰の父親」は、「私の息子は他界への境を踏み越えました。私の趣味からみると少々せっかちすぎたきらいがあります。(……)フロリアンがアハスヴェルの棍棒の下をかくぐってくれさえすれば私たちはもうこれ以上心配しないで済みます」と言った。しかしゲゼルは、ディステルが憎み拒否し続けていた父親の目の中に、一瞬、息子の目と同じものを見てとるのだ(126頁)。

3. 三日目の報告者はピウス・ゲゼル。「ぼくが探し出したタレントの中で一番風変わりな人物。空中電線工からラジオ技師になり、急に連続放送劇を書き始めた」(43頁)。「口数は少なく、目立たず、しかもひとつの器械のように厳として存在していた」(114頁)。スケッチが得意で、仲間のどれかれなく、主にその頭を画帳におさめていた。——しかし、「ピウス・ゲゼルはどう見ても怠惰だった。悪臭芬々たる怠惰ではなく、意味深長な

怠惰だった。自分自身でいることがもっとも汗をかかずにすむ正常かつ安静の状態であるらしく見えた。「たとえば、彼はイノアン社のために論文を書くほど熱くならず、むしろ——あとでわかるように——書くことを不毛であり技術的に困難であると考えていた」(116頁)。

彼の報告は風変わりなものだった。朗読者の席に着いたのはゲゼルではなく彼のテープレコーダーで、彼自身は少し離れたところに座り、時折、テープを止めてコメントするのみ。テープの朗読は、「遠からず勃発する戦争を前にして、ある軍隊のいくつかの分隊が戦闘位置につく」(115頁)ところから始まり、深く険しい国境目指して登高を開始する場面に至るも戦況の行方がわからなくなったところに来て、テープのゲゼルの語り口が淀み、本当のゲゼルがテープを止めて言う。「もうすぐ終わります。この先が思い浮かばないものですから」(117頁)。聞いていた者たちは哑然とし、その先の戦術について口々に提案したり、反論したりなど議論は紛糾する。しばらくしてゲゼルが皆を制して言った。「ありがとう！ 残念なことにテープがこれで終わりだ」(122頁)。彼は横に置いてあったもう一つの小型テープレコーダーでこっそり録音していた一同の議論を再生、物語の続きはこうして皆の想像力を借りる形で共同制作されたわけだ。「まずテープを回転させて口を節約し、それからわれわれの知性を馬代わりにして、他人様の車で自分の獲物を運ぼうという寸法だ！」(123頁)と皆は呆れたり怒ったりした。ゲゼルは「人間一人の頭の中で、人が思うほどたくさんのが起こるわけがない」(123頁)。「聞き手は、著者が十分に使いこなせなかった着想について、著者の仲間として発言してやる責任を負うべきだ」(124頁)と反論する。その独特な語りの理論や、テープレコーダーという記録メディアは「(自分の思考の) 実験段階を不足なく消化するのを助けてくれる」という点においてペンやインクが持たない利点を持つというゲゼルの主張を、ビショフは新鮮な驚きをもって聞く。

4. 報告者四番手はパウル・ヴァイガーストルファー、「ピック」が筆名の映画批評家であった。半年間ほとんどトーキョーを出ず、映画ばかり見ていたという(71頁)。ナラくらいは、と考えて出かけるも、ここでも映画館を発見、「憂鬱な映画に叩きのめされ、それでも社会学的考察のヒントを二、三得て」、きらびやかなトーキョーの歓楽街に戻る(72頁)。「ヒロシマは?」「行きやしません。」——そのくせそのヒロシマについて「私はあなたがたのために節度ある論文を書いて差し上げました」(67頁)と言っている。「あなたが間接的にしか日本を体験しなかったとはだれも信じますまいね、テレビ、映画、それ以外は?」「間接的に等とおっしゃいますな(……)あらゆる文化史家からよりも多く日本をお知りになれます」「映画で日本人は自画像を描き、自分たちの現実を解釈し、願望を表現します。押しつけがましくない、正直な言語を使ってです」(75頁)。

ヴァイガーストルファーの朗読した小品(「70を超えたヘルマンとドロテアの恋物語」、老人ホームにおける男女の恋の戯画)(73-181頁)は、才気はあるが愛を欠く高慢で浅薄な彼の人間性を示すものとして「くわせものでけがらわしい!」と一同の酷評を浴びた(182頁)。ビショフも彼を手厳しく批判する。「あなたは審美主義者だ、くちばしの黄色い審美主義者だけが誇張を好みます」「つまり体制批判が不可能だ?」「あなたには不可能です」(81頁)。——「あなたはいっぱし名の通った、しかもそう言ってよいでしょうが、体制的な新聞の映画批評家でいらっしゃる(……)たとえばあなたのヒロシマ論も、あなたのおっしゃる新聞に支障なく載せられますね、テーマの毒っ気はぬかれている」(89頁)。

5. 五番目の語り手は、病気を背負い込んで他の候補者たちよりずっと早く「ヤスミヤ」に現れ、部屋にこもりきりだったというアーダルベルト・フーン。いつもヘーゲルの書物を抱え込んでいるが、日本に来たのはヘーゲルのためではなく「ゼン」のための由、日本訪問に先立って、ある禅僧

に手紙を送り、スズキ・ダイセツの著書ほか何冊ものゼン入門書を読むなど準備は人一倍していたが、彼の日本はさんざんなものだった（102-107頁）。トーキョー（この馬鹿でかい灰色の村落！）ではエビハラという人（タイショー時代のある無頼な作家の息子の由）の家に厄介になり、週一度、訪ねて来る小柄な僧から通訳の学生を介してザゼンの指導を受け、コーアン問答の真似事もした。だがこのような「ゼン」に満足できず、どうしてもズイガンジを訪ねたいとトーキョーを離れ、センダイからマツシマに向かうも、念願のズイガンジの僧との会見は実現困難で、型通りのマツシマ島めぐりをしたり、ホエール・ウォッチングができるというイシノマキを訪れたり、空しく五週間を過ごす。一旦トーキョーに戻り、あるドイツ人に「著述のための閑静な部屋」を探してもらって日本海沿いの町センザキに赴くが、到着してみるとなんと殺伐とした海岸、なんと惨めな宿。黄金虫入り（？）のパンが出てきたりという食事は喉を通らず、やむなくタクシーで町に出て、自分専用の食料を買い込んで来て部屋にこもり、ついに熱を出して寝込むはめに。体力のいくらかの回復を待ってトーキョーに舞い戻り、ありたけの金を叩いてせめてミヤコホテルに五日を過ごしてトワダコ集合の日を待った。髪を刈り上げ、「徒刑囚か俗世に迷い得た仏のような姿で」（107頁）現れたフーンに当惑しながらもヤスミヤは部屋に入れてくれた、云々。

「病気が自分の日本滞在の成果を減茶苦茶にした」とフーンは愚痴る（90頁）が、ピシヨフの診断は容赦ない。「むしろその病気が彼にアリバイを与えたのだ。もともと本性に背いて——それだけ反抗心にかられて——日本から刺激を求めたが、結局彼はその刺激を拒否しようとして固い殻に閉じこもらずにはいられなかったのだ。つまり病気は殻にこもるための都合よい口実になった。偏狭な時代精神に凝り固まったフーンに、どうしてゼンの茶目っ気たっぷりの祝福と縁をつなぐことが出来たろうか」（90頁）。

フーンも自省する。「自分が日本の食事を消化できなかったこと、おそ

らくは最善のチャンスであったはずのセンザキを体得できなかったことの罰が今の体調の原因」「もしセンザキでなければ、どこで私は、ゼンによって生きる力をもつべきだったのでしょうか？ あれは私のチャンスだったのに、私はあれを台無しにしてしまいました。ゼンの代わりに病気を身に着け、その病気が私のゼンのあやまりを暴露するために体内からほとぼしり出て、苦痛と滑稽さで私をたたきのめしました」(108頁)。

彼の朗読「島の破壊」(195頁-)は消化しきれなかった日本という島への一種の怨念を込めた苦いものだったが、その同じフーンによるゴの説明(108-112頁)は見事なものだった。「ゴは日本そのものです。日本を前にして私は無残にも機能停止してしまいました。が、このゴにおいて、この独創的に簡素化された形で、日本はふたたび私に提供し直されました。収支決算をするチャンスがここにあります」「それでは、奥さんを相手にその競技をおたのしみなさい」「私は女房持ちではありません」(112頁)——鷹亭でビショフは診断を下す。「不器用で、人間関係の貧しい、だから問題にならない男だ」(113頁)。少なくとも宣伝広告マンとしては「問題にならず」、不合格というわけである。

6. 最後に登場するのがヴィルフリート・ブーザー。ヤスミヤ到着の初日、買い求めた土産物の仔馬を抱え、「昨日、女房が子供を産んだんです、この木彫りの仔馬のような子供をです」と言っていた「ざっくばらんなブロードの髪を持つ、人好きのするまんまるい顔の」男である。ビショフが文集の二番目におくつもりだというブーザーの作品(盲目の少女の恋の物語)についてはごく簡単に報告される(218-219頁)。一方、ブーザーが三日目、「ゲゼルの報告が行われた日の午後」に湖畔の砂浜でビショフに明かしたという実話、日本人の少女ヨーコと彼の恋物語は、ズーアカンプ版の原文で173頁から50頁近く、そして二段組みの宮下訳でも131頁から40頁以上費やして再話される。これは、小説『兎の夏』(原文で312頁、邦

訳で 241 頁)の中の独立した一章と見てよいほどの分量であり内容である。

日本到着後これというプランもなかったブーザーは、寒さを避けて南西の方角を目指し、かつ、古い日本が最も多く残されているといわれる地方を見ておこうと、キョート、ナラを訪れ、ヒエイ山で座禅も試みた、単なる観光旅行ではないものを求めているらしい彼に旅行会社が勧めてくれたアワジに向かうことにする。この地方の人形芝居は都会的に洗練され過ぎていない独特の魅力を持つということであった。オーサカの港でこの島に向かうために船を待っていたブーザーに、外国人相手に英語を使ってみたい女学生の一团が話しかけてきた。いつものこと故いつものように応じて最後に住所の交換をした。当座の宿の住所を書いておいたブーザーのところにある日、その中の一人から子供っぽい英語の手紙が届く。ヤマキ・ヨーコ? 「ひときわつぶらな目と明るく澄んだ微笑」を見せた少女の顔を思い出す。書かれていた下宿先の住所を頼りにブーザーは彼女を訪ねることにする。当然のことながら住所を示して尋ねるくらいではなかなか見つからず、哲学の道あたりをうろろうろしていた彼に「ハロー」と声をかけて来た女子学生がいた。買い込んだ果物の袋を抱えて彼の顔を覗き込んでいる。彼女だった! ——こんな都合の良い偶然もあるまいに、と私のような意地の悪い読者は考えるが、ともかく、これが二人の運命的な恋の始まりだった。

食事をとるためにブーザーの宿泊するホテルに行き、荷物を置くために彼の部屋に立ち寄ると、「二人はすぐさま愛し合った。すぐさまベッドの縁で、服を着たままで。ヨーコは処女だった。にも拘らず二人は愛し合った」(145 頁)。ブーザーは「妹を守るように」(130 頁)大切に、ヨーコは彼の意のままになることだけが快樂であるかのように、若い二人は、ひたすら愛の営みを続ける。近くに二人だけの小さな部屋を借りて慎ましい夫婦のように暮らした。ブーザーは肉欲 (Sinnlichkeit) と性愛 (Erotik) を区別しようとする (155 頁)。彼の言う所によれば、ヨーコは「およそ肉欲から遠い存在」であり、淫らさやコケットリーや余計な言葉は一切なし

に率直に性愛の快樂を喜んだ。「快樂は彼女にとって自明なものであって、あらゆるものの中でもっとも明朗快活な遊びだった」(156頁)。そんな彼女は「ひたすら多感でやさし」かった(159頁)。これがまたブーザーにとっては「この上なく深い快感であった」「これと同じようなものがヨーロッパのどこで味わえるでしょうか」とブーザーは遠い目をして言う。

(……) 彼はときおり、自分は一人きりで自分自身を愛している、という感情におそわれたほどだった——それこそ、彼が告白してはばかるいわれのない幸福の感情だった。なぜなら彼が知った自我は、他ならぬ彼女を媒介としてえられたものであったのだし、彼女の仲立ちによって知覚できた自我は、彼女の肉体の中でまったく新しい、想像を超えた色調を帯びたのであったから(156頁)。

ブーザーは「ボクはキミと結婚したい!」と言い出す。ヨーコは「一瞬、頭をゆすった。同時に彼女の躰が凍り付くように思われた。厳肅な瞬間だった」(160頁)。彼女は、恋人がヨーロッパでの生活一切を投げうって日本の自分のもとに留まろうとしていること、彼女自身はその不可能を思い、またそのような犠牲を望まないことを瞬時に悟ったのだ。彼女は「愛の無常さの明らかな危険」(161頁)を意識しつつも、ブーザーの願いを入れ、両親に紹介するためにキューシュー、ナガサキに近い故郷の村に彼を伴う。二日をかけての旅。途中、「ハギという名の愛らしい小都会」で二人は一夜を過ごし、「別離の予感」を深めつつ愛し合う。

古いキリシタンの伝統が残る村で「ウチムラの系統に連なるプロテスタントの自由教会の牧師」である父親(158頁)は、ブーザーの言葉とそれに続くヨーコの通訳を聞くと「吟味するように頷いた」(167頁)。病身をかこって自室にこもり切りのヨーコの母に代わってヨーロッパ人の求婚者を見定めようとやってきたヨーコの叔母、「他人の心を察する小賢しさ」

を持っているように見える「ござっぱりとした中年婦人」(167頁)の目にも、「やさしい間の抜けた物腰」のブーザーは合格したようだった。村人の目にも晒されながら二人は三週間をその村に過ごす。

その後、ヨーコは欠席が長くなり過ぎた大学(彼女は宗教学を専攻していた)に戻らず当面は故郷に留まり、一方ブーザーは、ひとまずヨーロッパに帰って身辺整理をして後、ヨーコを迎えに来る、という取り決めになる。実現の可能性はないことを当事者の二人だけは知っていた。そして合宿のためにトワダ湖畔集合の日が迫ったことを口実にブーザーはひとり北に向かい、そして今、ビショフの前で、いわば懺悔をしているのだった。ブーザーの目に一粒、二粒、涙が光る。

若い男の涙！ 幾世紀も前から人は涙というものの価値を知らずにいる。白銀の静寂が消え失せた。昔の人はその静寂の中で顔赤らめもせずに涙のしたたる音を聞くことができたし、しかも顔をあからめてもかまわないのだった。何というぜいたく！ どこかに、モーツァルトに近いところに、そんな土地があった。(131頁)

「ぼくらはというと、抑圧された涙の国に住んでいる」と感じるビショフは、「モーツァルトの国のどこかにいたに違いない」若者、だがその若者自身は「そんなことを感じ取れるほどコケットではなかったので、彼を二倍好きになった」。(132頁)

ヨーロッパの批評家は、「未来のない愛をこのように繊細に描いた小説は現代にはない」と感じた。P. H. ノイマンはこの恋物語は「非常に優美さと悲しみに満ちている」(von großer Anmut und Traurigkeit)と評し⁹⁾、ハ

9) Peter Horst Neumann „Kalliope im Kimono“, in: *Über Adolf Muschg*, Hrsg. v. Judith

ンス・マイアーでさえ、「最近のドイツ文学のもっとも魅力的な恋物語の一つ」(sie gehört zu den reizvollsten Liebesgeschichten der neuesten deutschen Literatur)¹⁰⁾と呼んだ。フェミニズムの評者なら「ナルシズムの極致」と酷評するかもしれない恋物語だが、私は、前述の児童書に登場したハンズィが青年になってウメを愛したらこんな物語にもなるだろう¹¹⁾と想像する。ヨーロッパでは求め難い「何か」をブーザーは遥かな東洋の地におけるこの恋に見出したのに違いない。オリエンタリズムの一種ではある。ある種の共感を覚えつつ三日をかけてこの恋物語を再話したビショフは、しかし、後日、ゲゼルのもとに届いたという「ラクダの絵葉書」の文面から、ブーザーがヨーロッパへの帰路、バイルートで降りてイスラエルに向かい、「ネゲブの奥地でトラクターにのって土地を耕し」たり、「機関銃をとってアラブの悪党から土地を守ったり」していることを知った。「とにかく、この星空は、断然一見の価値あり。敬具。ブーザー」という結びを読むとビショフはいささか呆れて「少々ふざけているね」と言う(237頁)。逃避癖の抜けないこの「妻帯者の若者」を皮肉ることも忘れないビショフの言葉には作者ムシクの自らに向けた皮肉(Selbstironie)が込められているかも知れない。ブーザーの恋物語の背景には作者自身の日本での恋があったからだ。

思い出しておくとして、「報告書」はビショフが(この間もずっと Du という親称をもって呼びかけてきた)上司マヌエルに宛てて辞意を告げる別れ

Ricker-Abderhalden, edition suhrkamp 1979, S. 104.

10) Hans Mayer „Adolf Muschg, *Im Sommer des Hasen*“, *ibid.* S. 110.

11) ハンズィの延長線上にある主人公は後にも現れる。後年の小説『レーヴェンシュテルン』(1993年)に登場するロシアの若い海軍士官レーヴェンシュテルンも遥かな国ニホンに憧れるがナガサキの沖までは来つつ、鎖国中の日本の地を踏むことはできずに終わる。2011年の日本小説『フクシマへの帰郷』に登場する初老の男パウル・ノイマンも「故郷を持たない人間」として異国の「フクシマ」に向かい、ミツと共にここに故郷を見出そうとする。

の手紙でもあり、何故やめるのかという問いへの答えの難しさゆえに、ビショフは「その不可能事を克服しようとして、遠い国へひきずって行き、いくつもの声に分割して、いくつもの人物に仮装させる」(239頁)形で長い手紙を認めたのだった。何かから逃げ、何かを探していた六人、「常習性孤独者、ディステルとフーン。活動的でありながら孤独であり続けた者たち、メルゲリとヴァイガーストルファー。気楽な隠遁者ゲゼル、責め苦を追った隠遁者、ブーザー」(202頁)は、ビショフの分身として、それぞれにビショフの(そしておそらくはムシユクの)一面を担っていただろう。

それら登場人物は、異国・異文化の衝撃そのものが原因ではなかったにせよ、日本訪問を機に大なり小なり転機を迎え、あるいは変容を遂げ、一人はネゲブの奥地に隠遁、一人は命をさえ絶ってしまった。自分の人生も今、大きな転機を迎えている、とビショフは述べ、自分の後継者としてゲゼンを推薦する。人選の方法、「テストの条件に該当せず、張りまちがえた網の脇をかすめて行った者」であるが故に「唯一テスト合格の証を示した」男ゲゼル(236頁)、「自分自身に、つまり自分が抱えている問題にのみ奉仕する、貴族的精神の人間」であるゲゼル¹²⁾こそは「宣伝の本質を理解する」(237頁)適材であるという確信からであった。

そして、このすべてが「兎の年」の出来事であったことに因み、ビショフはモットーに掲げたブレイムの「獣の生活」の言葉を念頭に、マヌエルにこう語りかける。„Du verstehst: es handelt sich um das Schnippchen, das ich mir schlagen muß, solange Hasenjahr ist“ (Muschg 1975, S. 316). わかってほしい、この「兎の年」の間に、ほくも老いた兎の逃走術を見習って「大き

12) ビショフは、予見や野心なくすべてにどこか超然として対処できるゲゼルの中に、小市民的環境に育ち人一倍の上昇志向と努力によって現在の地位に到達した自分(小説冒頭におけるPRマンとしての適性に関する考察の中にそれとなく置かれている自画像)とは違う資質を見ている。(scheiffelle, S. 96f.)

な急転回」をしてこの窮地からの逃走を試みようと思う。「急転回」のあとがどうなるかは全くわからないが、決行するつもりだ、許してほしいという趣旨の手紙は（そして小説『兎の夏』は）次の言葉で結ばれる。

„Der Hase, heisst es, schläft mit offenen Augen. Es wird Zeit, dass er mit geschlossenen Augen zu wachen beginnt“ (Muschg 1975, S. 317). — 兎は目を開けたまま眠るそうだ、その兎が目を閉じたまま目覚めはじめるときが来るだろうさ。(241 頁)

「目を閉じたまま目覚める」はムシュクらしい言葉遊びである。「マヌエル (=エマヌエル, 神)」に仕えていた「ビショフ (司教)」が職を辞する！ というのもムシュクの言葉遊びながら、後年の長編小説「赤い騎士」 („*Der rote Ritter*“, Suhrkamp 1983) の主人公 Parzival が、遍歴の末に聖杯王になるという（中世の伝説以来に彼に与えられている）役割を最後に辞退・返上してしまう構造を連想させる。ムシュクの Parzival は妻と子との小さな家族の長として自分だけの人生を生きることを選び取るが、ビショフは先の見えないままに「大回転」を試みる。書くスタイルを求めての帰欧後のムシュクの暗中模索もそのようなものであった。そしてその果てに「小説」が生まれ、「小説家」としてのデビューを果たしたのは、彼自身にとっても思いがけない展開だったのだ。ここに至ってムシュクはようやく、彼の上へのしかかっていた二人の「父親」、即ち、「ツォリコン・ボーテ」という新聞を独壇場とした編集者・作家でもあった父親¹³⁾、そしてパーゼル大学教授で著名な文学史家ヴァルター・ムシュクの呪縛を脱し、その重圧を撥ねのけて「アドルフ・ムシュク」としての出発が可能になったのだ¹⁴⁾。

13) ドキュメンタリー映画参照。

14) Manfred Dierks はこのプロセスを「一種の父親殺し」と呼ぶ。Dierks S. 76-101。

Ⅲ. とりあえずの結び

ムシユクにおける〈日本〉について書く予定であった。だがここまで読んで来て思うのは、『兎の夏』は日本を舞台に展開しつつも「日本そのもの」をテーマとするものではないということだ。ハンズィのように故郷では見出せなかった「何か」を求めて日本に赴いたムシユク。「何か」とは「何」であったのか。果たしてそれを見出せたのか。それを明らかにすべく、帰欧後ムシユクは、自らの体験を六人の、否、語り手ビショフを入れれば七人の登場人物に振り分けて描きつつ、日本を媒体にして自分自身と対峙し、収支決算を試みている。その意味で『兎の夏』は、ムシユクが「日本そのもの」ではなく、日本を媒体として自分自身を探ろうとする物語、ムシユク自身をテーマとする物語と見るのが正しいのではあるまいか。

初めから特別の関心を持って日本に来たわけではないように見える六人。メルゲリは日本での体験をステップに教授資格を狙う高校教師、ゲゼルはイノアン社の奨学金で行けるのなら有難いことと日本行きを決めた無欲といえは無欲な男、ヴァイガーストルファーは映画批評家として自分の関心のみを追う野心家、フーンはゼン以外のものに心が向かないゆとりのない人間、ディステルは憎んでやまない父親と自分自身からの逃走を求めていた男、そしてプーザーはヨーコとの恋の思い出に涙するのみの茫洋とした若者。小説は、このような六人が「いかに」日本を体験したか、それぞれの背景や性向、願望による主観的バイアスを帯びた「日本」を描いてはいる。たとえばプーザーの恋人、彼のためにのみ存在する愛らしく従順な「ヨーコ」¹⁵⁾は、彼の願望が産み出した「日本女性」であり、一刻も早く「サトリ」に到達したいフーンの目にはトーキョーもマツシマもセンザ

15) シャイフェレが、ヨーコは「人形のように愛らしく従順なばかりの女性」としては描かれていない(Scheiffele, S. 175)と言うのは正しい。プーザーの意に添うように動きつつも自分の考えを持ち、自分の意志を貫いているという意味では「敦子の結婚」における敦子、『フクシマへの帰郷』におけるミツと共通するつよさ、良い意味のしたたかさを持っている。

キも一様に空しく腹立たしいだけの土地でしかないし、そこで泊まった宿もみじめ極まる（102-106頁）。すべてを斜に構えて見る性癖のあるヴァイガーストルファーは、トワダ湖畔に立つブロンズの「姉妹像」も、お土産品のブンゼン・バーナーで黒くした「木彫りのクマ」も、夏には観光客で溢れるホッカイドーの「アイヌ部落」も、外国人の持つイメージに合わせて造られたまがい物でしかないと決め付ける、など。

こうして体験された六通りの「日本」をまとめ、それらから微妙な距離を取りつつ報告するビショフ、さらにはその背後に隠れ潜む作者ムシク自身にとって日本は「何」であったかは、この段階ではまだ明らかではなく、少なくとも直接には描かれていないように思うのである。後年に至ってムシクは「自分の日本滞在は前方に向かっての逃走であった」¹⁶⁾と書く。「前方」に究極的に何を見出すのか、それは『兎の夏』の段階ではまだ明らかではない。なるほど「作家」としてのデビューを果たしたがそれはまだ出発点でしかない。ドキュメンタリー・フィルムの中では、彼は「日本は自分の人生における〈他なるもの〉であった」¹⁷⁾と言っている。その「他なるもの」¹⁸⁾が何なのかを作家ムシクはこれ以降もずっと探り続けてゆく。

それゆえ『兎の夏』を扱いつつ私がこの稿でできることは、六人と彼らについて報告するビショフが日本を「いかに」体験したか、断片を拾い集めて見ることだけである。そこに見出されるのは、古き良き日本、憧れの

16) “Literatur als Therapie?” S. 102.

17) „Japan war in meinem Leben das Andere.“ „das andere“ と中性冠詞をつけ、„der Andere“ 「他者」とは言っていないことに注目しておきたい。

18) シャイフェレはその答えはすでにこの小説の中にある、として、どろりとした血の付着したマグロのスシを観念して食べきるビショフの次の言葉を挙げる。「あの一瞬間ぼくは舌もろとも、異国を包む境の外へ投げ出された。いいかえれば、あの時ぼくは一種の、おぞましい故郷に触れたのだ」(6頁)。異国のなかに故郷を見出したのだ、というシャイフェレの解釈はおそらく正しいが、この段階ではまだ予感に過ぎないと私は考える。

日本に留まるものではもはやない。映画を通して「間接的」にしか日本を見ていないのではないかというビショフの批判に対し、ヴァイガーストルファーはこう言う。

間接的だって？ それでは何が直接的なのですか？ ——旅行業者が最低の水準でお膳立てし、費用の段階別に分類して、一回分のバス旅行に組み立てる観光名所のことですか？ 西欧的観念における異国情緒の本体を確認するだけです。(76 頁)

彼はたしかに日本の一面を言い当てているのだ。ガイジンには「ゲイシャ・パーティー」をあてがうのが最善のもてなしと考える、政治やビジネスの世界に生きる日本人男性たちの陳腐な常識は、「西欧的観念における異国情緒」付度の典型的な例であろう。『兎の夏』においてもヤスマヤでの最後にそうした一夜が用意される。しかし当日、早くからいそいそと得意げに準備にあたるイノアン社日本支部接待役のアキノリの姿は皮肉を込めて描かれ、他方、パーティーそのものは、ある日「鷹亭」で繰り広げられたスイスの田舎の結婚式の野放図さに比較すれば、ゲイシャたちの様式化された音楽や踊りのサービスとビショフら一行の当惑しながら杯をさしたり受けたりするやり取りのうちに、さほど乱れることなく終わる。こんな場面を含め、「戦後の産物、ばかげた暇つぶし、パチンコ」に人々が何時間も座って無言で興じる姿(206 頁)も、ゲゼルでさえ逃げ出した大都会トーキョーのあちこちに見られる安直で軽薄な「疑似文化」も、ムシュクの目に映った六十年代半ばの日本の一面であったに違いない。

他方、比較的先入観なしに来日したビショフが寝台車でアオモリ到着に近い時刻、「ほのかなしらじら明けに目が覚めて」目にした、

(……) 小さな窓を押し開け、頭を突き出すと、朝の光に淡く見える木立が鼻の先をかすめた。ふかぶかした藁屋根をのせ、木々につつまれた農家が、ゆっくり動いて、ほくを未知の日本へいざなった。水田の畔の^{あぜ}すじがよじれもつれ、稲妻のようにジグザグの線を描きながら、みずみずしい緑の稲をつつんだ。一分ごとに水田の緑の明るさが増し、その上に松の木の影がくっきり落ちた。(……) (19 頁)

という光景は、まだ外来文化に汚されていない美しい日本である。初めて目にする「マグロのすし」についてのビショフのコメント、

「やわらかな魚の生肉。鮭よりももっと赤い(が、鮭ではない)。それが一口分の米飯のうえにのっけていて、その米の上には、おそろしく辛い草根をすりつぶした薬味がはめ込まれている。この辛い根っこがなくとはいけないのだそうだ。マグロのスシは、愛撫の味がする」(5 頁)。

は有名だが、鷹亭の脂ぎったカツレツと対比される日本食についての次の記述¹⁹⁾、

日本でほくが愛したのは、これだ。あの国では食べものが動物的な重さを全然もっていないということだ。それらははじめから抽象的に配置されて卓にのっけている。非物質化されて、色とりどりの要素から一つの模様をつくっている。趣味高尚に選別され、素性も混ぜ合わせ方も知りようのない材料が作る模様。(……) (65 頁)

19) ビショフは回想の日本に共感を寄せ、現前にある自国の田舎びた日常に対しては批判的である。シャイフェレはそんな彼を Japanliebhaber (親日家) と呼ぶ (Scheiffelle S. 91)。

あるいは、毒舌家ヴァイガーストルファーが珍しくも讃嘆の口調で描写する日本の盆踊り、

(……) だれもが単純な動きをします。手足の指の先まで動きます。まるで一つの川の流れですよ。腰はこわばらず、肩にかけた紐はひきつらず、水田をかすめるように抵抗なく風が体を吹き抜け、手が関節からはなれてその風を追うように見えます。手は苗を植え、稲束をしごき、空気と優雅さから刈り取ったものを束ねます。(……)」(70-71 頁)

なども肯定的に体験された日本である。

その他、引用は省くが、ビショフの宿があった「シブヤ付近の大通りから二歩も外れた」あたりの静かで情趣に富む光景や「小鳥売りや金魚売り、読経の声、ふるえる竹笛の音」などさまざまな音の描写(95-96 頁)、フーンによる「ゴ」の説明(前述)、ヴァイガーストルファーの朗読のあとの議論が険悪になりかけた時、ふとゲゼルが吹きはじめた笛、「ノーで使われるのと同じ笛」(182 頁)の音色、そして「これはノー芝居のはじまる直前に響く音だ」という言葉に始まるゲゼルによるノーの舞台の描写(182-185 頁)、「雨の中の日本の樹」の風情(205 頁)、神社の屋根の反りの描写(228 頁)等々は忘れがたい美しさを持つ。このように登場人物の誰彼の口から語らせる形で小説のあちこちにちりばめられた日本文化についての長短さまざまな断章は、ムシユクならではの精確で繊細な美しさを持つ。

しかし別の意味で美しいのは、ブーザーがアワジの宿に滞在中、「あたり一帯で唯一の外国人」だった彼が「土地の人々の人懐っこさのおかげで、外国人という特殊な身分」を忘れていられ、言葉が通じなくても素朴

な人々のさりげない親切につつまれて過ごす一週間が描かれる個所（137-138頁）や、「都会の下等な疑似文化に嫌気がさし」、北に向かおうとゲゼルが乗り込んだ汽車が「ヒライズミとモリオカの間で列車が吹雪の中に突入」し、ついに動けなくなった時の日本人乗客たちとの人間的であたたかい交流が描かれる個所（224-225頁）などである。ゲゼルはこれを機に「人間らしい人間たちの中で」、「およそ外国人が来ることのない、自分が唯一の例外である状況が長続きしそうな場所で暮らそう」と考え、トワダ集合の日までホッカイドーはテウリ島で過ごし、「もとノーの笛師だったという人のところ」に寄宿、「鳥たちとのつきあいだけで満足していた」という。

言葉が通じないにも拘らず、あるいはむしろ言葉が通じないからこそ、人と人間的に交わることができる、そんな感性をムシュクは、彼の後年の日本小説『フクシマへの帰郷』の主人公、パウル・ノイマンにも与えた。彼は被災地の人々の間の複雑な関係や彼らの想いをミツの通訳なしにでも驚くほど繊細に捉え得た。「ムシュクの日本」という時、私が指摘したいのは、このような感性を持つ人物を登場させ、彼らを通して日本人や日本文化について、ステレオタイプでなく、むしろ人のあまり気づいていない、地味で目立たない美しさを描く時の、作家ムシュクの謙虚な姿勢、共感の表明を極力控えた冷静な筆致である。（その二に続く）

文献リスト

- Adolf Muschg: „*Im Sommer des Hasen*“, Suhrkamp taschenbuch, 1975.
Derselbe: „*Literatur als Therapie?-Ein Exkurs über das Heilsame und das Unheilbare. Frankfurter Vorlesungen*“, edition suhrkamp, 1981.
Derselbe: „Hansi, Ume und ich“ in dems.: „*Die Insel, die Kolumbus nicht gefunden hat. Sieben Gesichter Japans*“, Suhrkamp 1995. S. 17-25.
Derselbe: „*Der Rote Ritter. Eine Geschichte von Parzival*“, Suhrkamp 1993.
Derselbe: „*Heimkehr nach Fukushima*“, C.H. Beck 2018.

- Manfred Dierks, „*Adolf Muschg. Lebensrettende Phantasie. Ein Biographisches Porträt*“, C. H. Beck 2014.
- Heinz Liepman, „Dazwischen eine Liebesgeschichte“, in: Judith Ricker-Abderhalden (Herausgegeben) „*Über Adolf Muschg*“, edition suhrkamp 1979, S. 111–113.
- Hugo Löscher, Helvetische Hakensschlag, in: Judith Ricker-Abderhalden (Herausgegeben) „*Über Adolf Muschg*“, edition suhrkamp 1979, S. 104–108.
- Peter Horst Neumann, „Kalliope im Kimono“, in: Judith Ricker-Abderhalden (Herausgegeben) „*Über Adolf Muschg*“, edition suhrkamp 1979 S. 101–104.
- Eberhard Scheiffele: „Das Verhältnis zu Japan“, in: Manfred Dierks (Hersg.) „*Adolf Muschg*“, suhrkamp taschenbuch materialien 1989, S. 82–115.
- Eberhard Schwabe, Nachwort, in: Judith Ricker-Abderhalden (Herausgegeben) „*Über Adolf Muschg*“, edition suhrkamp 1979, S. 113–120.
- A. ムシュク著, 宮下啓三訳: 『兎の夏』, 新潮社 1972年。
- A. ムシュク著, 野口薫訳: 『ハンズィとウメ, そして私』, 朝日出版社, 2010年。
- A. ムシュク著, 野口薫訳: 『レーヴェンシュテルン』, 松籟社, 2015年。
- A. ムシュク著, 野口薫, 美濃部遊, エヴァ・ビリック訳: 『フクシマへの帰郷』, eブックランド社, 2021年。